

特集にあたって

佐藤 創

海外、とりわけ開発途上国を旅した折に、お金そのものやお金の取り扱い方に多少の異文化を経験したことのある読者も少なくない

のではないだろうか。たとえば、紙幣に書き込みがあつてこれは使えるのかと戸惑つたり、お釣りの小銭がなくて待たされたりするなど、思い当たることがあるかもしれない。

本特集は、お金のあり方や扱われ方を通じて垣間見ることのできる開発途上国の諸相があるのではないかというアイデアに基づいて企画された。金属であるコインに光を当て、それぞれの国の社会科学や人文学を専門とする研究者に、実際にその国に暮らし、あるいは何度も赴いた経験のなかで、コインがどのような存在であつたかに思いを馳せ、あるいはコインにまつわる興味深い話を掘り出し

てもらふなど、コインからみえる開発途上国のお国事情について執筆してもらつてゐる。

●カイル峠のアフガン

紙幣より

貨幣論を専門とするわけでもなく、コイン収集家でもない筆者が、このような特集を編んでみようという蛮勇と呼ぶほかない想念を持つにいたつた端緒は、二〇〇一年の春に遡る。その昔アレキサンダー大王がはるばるギリシアから攻め込んだことでも名高いカイル峠を、パキスタン側から旅してアフガニスタンとの国境近くの見晴らし台にたどり着いたときのこと。地元の子供たちが近寄つてきて、アフガニスタンの紙幣セツトを売りたいという。いくらだと言いついてみたところ一〇〇ルピー

(パキスタン通貨)との話で、為替レートもわからず、またお世辞にも紙質が良いとはいえず、これでは記念品としても買う人がいるのだろうか、などと思いながら、コインはないのかと何の気なしに聞いてみたところ、ないという。

そのときはさして深く考えもせず、コインは持つてこなかったのだらうと思つてそのまま忘れてしまった。当地は、同年に起こつた9・11テロ後に風雲急を上げて、カイル峠ツアーも実施不可能になったようで、たまたま目にしたニュース番組で、ツアーの目玉であるSL列車の車掌が「商売があつたりだ」と嘆いていた。

その後、開発途上国を訪問する経験を重ねるうちに、お金が日本と違つてきた筆者の感覚と随分と違つた扱い方をしているケースにたびたび遭遇した。たとえば、

筆者がニューデリーに駐在していたときには、小額通貨を持つていないと落ち着かなかつたものだ。なにか買ひ物をしようとすると、最新のモールに入つてゐるお店においてさえ、細かいお金はないか、と、毎度のように聞かれるからである。自然に、財布にはいつも小額紙幣がそれなりに入つてゐるようになつた。

ただ、紙幣がどこもなく香辛料の香りがして、財布自体もしいに移り香が薫るようになる。コインもあるものの、紙幣に比べると手にする機会が少なくなつて、インフレ率が高いせいか、路上の大八車の売り子から野菜を買う際にも五ルピー(およそ一〇円)未満の小額コインの出番は減つてゐる実感があつた。実際インフレは深刻な問題で、インド大蔵省で主席経済顧問を務めていたカウシク・バスター(現在は世銀チーフエコノミスト)が、インフレを抑えるには小売業への外資の参入を認めて流通を簡素化する改革を進めればよいという論陣を張るなど、毎日のようにインフレ問題が有力紙の紙面を賑わせていた。

そうした記事のなかに、二五パイサ以下(約〇・五円)のコイン

はもはや役に立たず、違法につぶ

して金属として転売する業者が受け取るだけなので、政府はこれを廃止することに決めたことを報じながら、さらに五〇パイサ・コインや一ルピー・コインもいつ廃止になることやらと、政府のインフレ対策の無策ぶりを揶揄しながら論じている記事があった。なるほどインフレ率が高いとコインの運命は貨幣としては風前の灯となり金属として扱われるのかと思うと、ふと記憶がよみがえり、カイバル峠で出会ったあの少年は、コインを持つてないと言いたかったのではなく、コインそのものがアフガニスタンにはないと言いたかったのかもしれない、と思った。

調べてみるとアフガニスタンにはやはりコインはないようで、他にもコインがない国や、あってもコインの生産を外国に委託している国もあるではないか。経済学者の端くれとして自らの無知蒙昧ぶりに反省しきりである折から、昨年暮れにはバン格拉デシュが自国で使うコインの鑄造を入札にかけ、日本の財務省・造幣局が受注に成功したことが話題になっていた。

●コインからみるお国事情

おおむねこのようなところが本特集を筆者が提案するに及んだ背景である。もちろん各国のコインがどのようなものかウェブで検索することは難しくなく、また東西古今のコインが写真掲載されているコレクター向けの詳しい本もある（たとえば参考文献①）。

大英博物館コイン部門の職員の手になる一般読者向けの参考文献②は、古代から現代にいたるまでのような貨幣が用いられてきたか、金属の支配と帝国の興亡（こうぼう）など歴史的な逸話を豊富に盛り込みつつ描いている。また、学術的な著作である参考文献③には、たとえば、日本からの輸入銅でコインを製造していた一七世紀のインド・グジャラート州で日本からの輸入が減ったために鉄貨（てつか）を用い始めた例や、一八世紀にオーストリアで流通していたマリア・テレジア銀貨が、本国ではどうに使われなくなったといった二〇世紀前半に北アフリカから西アジア地域で流通していた例など、興味深い実例が、実証的かつ理論的に分析されつつ満載されている。参考文献④は、二〇一一年のノーベル経済学賞受賞者が、欧州諸国において一九世紀

末にいたるまで存在した小額通貨不足の問題を、通貨当局が依拠していた経済理論が不十分であったのか、コイン生産の技術が未熟であったのかという関心から、経済学の手法を用いるなどして検討した著作である。

コインを扱うものとして本特集はささやかなものであるが、ひとつ際立った特徴があると思う。それは、執筆陣がそれぞれの国に暮らし、あるいは長く関わった経験があるため、それぞれの国の人々とその生活へのいわば暖かいまなざしが底に流れているということである。一〇カ国ほどの国々について、それぞれコインから垣間見える開発途上国事情について紹介した本特集を読むと、たとえば、デザインはどのような社会的背景を反映しているか、鑄造にはどのような困難があるか、インフレとコインがどのような関係があるか、コインは日々どのように扱われているかなど、実感をもって伝わってくるのではないだろうか。もちろんすべての国々をカバーできているわけではないが、取り上げた事例を通じて、読者が開発途上国に生きる人々の生活に思いをめぐらす契機となれば望外の幸せ

である。

（さとう はじめ／アジア経済研究所 南アジア研究グループ）

《参考文献》

- ① 平石国雄・二橋瑛夫編著「二〇〇二」『世界のコイン図鑑、カラー版』日本専門図書出版。
- ② ウィリアムズ・J「一九九八」（湯浅超男訳）『図説お金の歴史全書』東洋書林。
- ③ 黒田明「二〇〇三」『貨幣システムの世界史…（非対称性）をむ』岩波書店。
- ④ Sargent, T. J., and F. R. Velde 2003. *The Big Problem of Small Change*, New Jersey: Princeton University Press.